

震災被災地における怪異の場

鈴木 岩弓

I

「人の間」と書くことが示すように、われわれ人間は、常々複数の他者との関係性の中で生きている。そこで取りもたれる人間関係の多くは生者同士だが、死者と生者との関係に根付く場合もしばしばある。(生者から死者への働きかけ)の場面を日本文化の中に探れば、仏壇に手を合わせたり、彼岸や盆に墓参りをする信仰習俗の多くの場面が想起されよう。また(死者から生者への働きかけ)の例としては、「水子のタタリ」という時の「祟」、即ち「俺はここにいるぞ!」と死者が「出て示す」祟の場面があげられる。換言するなら、われわれ生者は生者同士の関係のみならず、既にこの世にはいない、今は亡き死者との間の関係をも保持しながら日々の生活を送っているのである。

二〇一一年の三月十一日に勃発した東日本大震災は、岩手・宮城・福島三県をはじめとした震源近くの地域のみならず、日

本国中の多くの人々を巻き込む形で、想定外かつ未曾有の被害を生じてきた。関連する被害状況については、警察庁緊急災害警備本部が震災直後より最新被害状況を随時インターネットで公開してきたが、二〇一四年三月からは月一回、毎月十日の更新に変更されることになった。こうした変更の背後には、震災から三年を経て、被害情報がほぼ正確に把握されたとする判断があったことと思われる。

震災から丸四年が経った二〇一五年三月十一日現在、東日本大震災による死者は一五八九一人、行方不明者は二五八四人にのぼっている。この一万五千余の死者の大部分は、東日本大震災が起これなければ亡くなるはずではなかった人々である。言い換えるなら、今回大量死した犠牲者の多くは徐々に衰えた「衰弱死」ではなく、地震とそれに伴う津波による「突然死」としてその命を終えたのである。そしてさらに、こうした犠牲者の背後には、その人々と近しい関係の家族・親族・友人・知人が、おそらくその何倍何十倍もの数いたはずである。それらの人々

にとつて、身近に生じた「死」は文字通りの「突然死」であった。特に津波被災地においては、一家族から四人も五人もの死者が出たケースがあり、生き残った生者が一人で複数の「死」を受けとめなければならないといった悲惨な話は珍しくない。さらに、自分が手を離れたために津波に呑まれた死者が出た場合など、その「死」の原因を生き残った自分の至らなさに帰して責任を感じている人も多く、身近に生じた震災死は悔やんでも悔やみきれない、負い目」というストレスとなつて、癒えないままに継続している。

被災地におき、「亡くなったはずのお婆ちゃんが立っている」とか「海の中から沢山の眼がこつちを見ている」と言う声や、「ゴツソリと」聞こえ出したのは、震災のあつた年の夏頃からのことである。とはいえ、被災地に広まつたこうした（死者から生者への働きかけ）に関わる話を、自己の体験として語る人と出会う機会は多くない。大半の場合、友人や知人から聞いたという「又聞き」や、誰言うともなく聞いて知っていた「噂話」といった形での情報取得に基づくことが通例である。

とはいえ、そうした（死者から生者への働きかけ）に関する話に通底している共通認識は、死者は死んでしまった存在ではあるが、生きているわれわれ生者に対して何らかの働きかけができる能力をもつ、という点である。そうした死後の人間の存在は、これまで「死後靈魂」「死霊」などの用語で語られることが多かった。これら死後の人間存在を想定する考え方には、霊

肉二分の考え方が前提されている。つまり生きている人間は靈魂と肉体から成り立つてその姿を構成しているが、ひとたび死を迎えると、靈魂は肉体から離脱し、朽ちていく肉体とは異なつて、死後も存在していくという考え方である。

わが国では霊肉二分的考え方をする人が珍しくなく、「死後の靈魂の存在を信じるか否か」という質問項目は、一九五二年の『読売新聞』以来、時代を通じて新聞社などが実施する社会意識調査で取り上げられてきた。筆者自身も二〇〇三年と二〇一〇年の二度、科学研究費の助成で全国調査を実施したが、どの調査結果を見ても肯定的に「信じる」とする回答の占める割合が一番多く、最低でも三五%、多いと六〇%に及ぶことが明らかになる。とはいえ「死後の靈魂の存在を信じますか」といった質問は、肯定的な判断をする人にとつて、正直に答えることはなかなか難しい。もしも「はい」と答えると、科学的・合理的思考を尊重する現代的価値観からは、「教養がない」とか、「迷信深い」「変わった」といった負のレッテルを貼られることが多く、それを恐れて正直に答えられない可能性が生じるのである。かかる意識調査では、質問がなされた状況が重要となる。従つてその点が不明瞭なこれまでの調査結果を用いる際には、最低限、死後靈魂の存在を「信じない」人が、毎回二〇%から三〇%ぐらい必ずいるという点に留意すべきである。逆に言うならば、戦後のわが国では、七〇%近くの人々が死後靈魂の存在を否定してはいないということになる。

日本社会では、死後靈魂の存在は今述べたような微妙な問題を孕んでいるため、〈死者から生者への働きかけ〉を経験したと言う人で、その経験を医者に相談したという例は管見の及ぶ限り聞いたことはない。科学の先端に生きていると考えられる医者に対してそうした話をして、正面からその「事実」に取り合ってくれず、恥を搔くのが落ちだという読みからである。確かに、「死者が見える」と相談されたとしても、医者は立場上、患者が見えるという「死者の存在」自体を科学的に説明することは不可能で、その結果、患者が「見えている」こと自体が否定されて「譫妄」と診断される可能性すらあるのである。

こうした時、信頼できる相談相手として頼られる専門職は、多くの場合医者ではなく、宗教者である。というのは、宗教者は宗教に関わるというその特質上、死後世界の存在を認め、そうした世界とも繋がりをもつことが多いからである。宗教は一般に、われわれ生者が生きている「この世」のみならず死者が赴くという「あの世」の存在も認めた教えをもち、宗教者はそうした教えに基づいて信者と対峙する。かかる教えがより顕著なのは、宗教の中でもとりわけ、「世界宗教」と呼ばれるキリスト教や仏教、イスラームで、これらが世界中に広まった根拠こそ、「この世」は仮の姿で、死後の「あの世」でこそ救いもたらされるという「現世拒否の思想」である。われわれのもつ性・人種・民族・身分・経済力・家柄等々のあらゆる差異は、「この世」における仮の価値にすぎないとする認識は、「この世」に生

きる全ての人を受け入れ可能とするがゆえに世界中に広まったのである。その意味で言うなら、宗教者は死後世界のメッセンジャーということもできよう。〈死者から生者への働きかけ〉を経験したと言う人の相談が宗教者に対してなされることが多いのは、こうした理由からと考えられる。

本稿では、東日本大震災の被災地に見られる死者と生者の出会いの場のうち、とりわけ〈死者から生者への働きかけ〉を経験した事例に注目し、その出会いの意味を考えてみたい。筆者は、震災前から宮城県南から福島県相馬市、南相馬市において継続的に調査を行ってきた。その関係から、本稿で扱う事例の多くは、そうした限定的な地域のデータが手掛かりになる。

なお〈死者から生者への働きかけ〉にみられる死者のことを「幽霊」と呼ぶことがしばしばあるが、本稿ではこの語の使用はあえて避け、そうした働きかけを「怪異現象」と呼ぶことにする。その理由としてはまず、〈死者から生者への働きかけ〉を直接経験した人自身、あるいはそうした話を伝聞として語る人が働きかけの作用因について述べる時、必ずしも「幽霊」の語を使っていないことがある。ちなみに、以下に示す筆者が収集してきた話を伝えてくれた人で、「幽霊」という言葉を使って私に説明した人は皆無であった。「幽霊」の語を使用するのは、そうした現象を対象化して整理する研究者、宗教者、報道関係者たちが多く、現象の外縁にいる人たちが、直接間接にその経験をした人たちの言説をまとめ上げるときに「幽霊」という言葉を

当てはめているケースが多いものと思われる。

もう一つの理由は、「幽霊」という用語自体の問題である。柳田國男をはじめ先学の多くが、昔から「幽霊」の語をそれぞれに定義して来た。また、類似概念の「妖怪」「お化け」などと「幽霊」がどう違うか、といったことを論じてきた。ところが、そうした概念整理における線引きはなかなか難しく、従来言われてきた定義では、概念が重なり合う部分が必要出てくるという問題が生じてくる。そのため本稿においては「幽霊」の語は使わずに、〈死者から生者への働きかけ〉を「怪異現象」という語を使用して整理したい。またこうした話については、当事者が「幽霊」と考えているかどうかにこだわらず、ともかく正常な状況ではない、チョット不思議な状況であると認識している点に留意し、「怪異譚」と呼ぶことにしたい。

II

ここではまず、福島県相馬市において聞こえてきた十編の「怪異譚」を、簡単なコメントと共に列挙しよう。

①スーパー跡地で「早く卵を買わないと」という複数の人の声が聞こえる。

この話は、津波で地域が壊滅した、港近くにあった土台のみが残るスーパー跡地での話で、そこに行く姿は見えないので

あるが、人々の声がするという噂話である。「聞こえる」という表現は、「聞こえた」とは異なり、こうした現象があたかも一回限りのものではなく、この話を初めて聞いた人が行ってみてもこの声を聞くことができるかの印象を含んでいる。

②津波で壊滅したA地区で新品のカメラが突然動かなくなったが、他地区へ移動すると今まで通りに使えるようになった。

津波被害の大きかったA地区。相馬市には地区の建物がほぼ流されて壊滅した地区がいくつかある。そうした中のA地区で写真を撮ろうとしたら、直前まで他の地区で写真撮影をしていた時は問題なく動いていた新品のカメラが、突然動かなくなつたという話である。その後さらに別の地区へ行くと、カメラは問題なく作動したので、あれは何だったんだろうというわけである。これは、こうした経験をした当事者を知人にもつ人が、その当事者から直接聞いたという人から聞いた話である。このことから、A地区は他の地区とは異なる特別な空間であることが印象づけられる。

③津波で壊滅したB地区の自宅の電話から、自分の携帯に電話があり、着信記録にもその番号が残っている。

これもまた、壊滅的被害を受けたB地区での話である。ここも見渡す限り家の土台しか残されていない地区のだが、津波に流されて今は何もないはずの自宅の電話から自分の携帯に電

話があつて、着信記録まで残っているという話である。これは死者や幽霊、お化けと言つた存在が前面に出るのではなく、おそらく壊れてしまったであろう人間の作った機械の電話機が、そこに住んでいた家族に対して連絡してきたという、まさに怪異現象としか言いようがない都市伝説的な話と言へるであらう。この話を直接経験した人が誰なのかなどといった点は不明で、噂話として聞かれる。

④朝の三時頃、新聞配達中に立ち話をする人々、捜し物をしてゐる人々を目撃するが、そうした人々はチョット目を離したスキにすぐに消えてしまふ。

場所は特定されないままに、新聞配達の人を目撃談として聞かれる噂話である。まだ人がそれ程活動する時間ではない早朝にも関わらず、被災地の中で動き回る人を見るのが良くあるという。こうした話は被災地で広く聞かれるが、チョット目を離したスキに姿が見えなくなつたというところが共通点である。見えていたはずの人が消滅したことで、実はそこに見えていた「人」自体が、この世に存在する人間ではなかったのだと気づくわけである。ただその際、その存在者が何者であるかについてはお化け、幽霊、死霊、死者などと呼ぶことはなく、敢えて触れられずに、この話を聞く人々の想像力の中に留められる。

⑤タクシーに客を乗せてB地区へ行き、行き先の詳細確認のた

めに運転手が後ろを見ると誰も乗っていないかつた。

この話は日本全国で良く聞かれるタクシーに乗る幽霊の話、あるいはブルンヴァンの「消えるヒッチハイカー」に出てくる都市伝説にも通じる内容と言へる。ここでも④と同様、目を離していた間に姿が消えてしまつたということで、この話を聞いた人の想像力を掻き立てることになるのであるが、とりわけこの場が、津波で壊滅したB地区であつたという状況設定は、消えてしまつた人がB地区で津波に流された「人」ではないかという含みとして伝えられる。

⑥人をはねたので急停車したが、被害者はもちろん事故の痕跡も全くなかつた。このことを警察に電話で報告すると、「この話は、今晚、あなたで七人目ですな」といわれた。

次に、自動車を運転中に人をはねたので慌てて急停車しただけ、被害者の姿は見えず、車体にも事故の痕跡はなかつたと言う話である。このパターンの話は、今回の震災被災地では他にも聞くことができたもので、私自身は石巻で聞いている。ただし、石巻警察署では、「そうした話は、今晚あなたで五人目ですな」と言われたといい、警察から伝えられる人数についてはバリエーションがある。

⑦靈感の強い人は、A地区やB地区に行くと気分が悪くなるので、極力行かないようにしている。

これは噂話として聞こえてくる話であるが、私自身、そうしたことを言う本人から直接聞いた経験もある。ある時、市役所関係者の運転する車に同乗してB地区の先にある地区に行こうとした際、わざわざB地区を通らない遠回りをする道を通りたいたと言われたので、その理由を尋ねた時に、こうした言い方を聞いたのである。確かに震災後、被災地では犠牲者が多数出た地区に入りたくないと言う物言いを聞くことは余り珍しいことではない。時には、「津波で人々が流された海に近づきたくない」という言い方をする、以前は海近くに住んでいた人もいるという。その場合何かが見えると行つた訳ではないのであるが、多数の人が亡くなった空間に対して、忌避する感覚がもたれているものと思われる。

⑧大半の家が津波で崩壊した地区で、運良く被災を免れた自宅に住んでいるのだが、玄関のベルが鳴るので出てみても、誰もいないことがたびたびある。

壊滅的な被害を受けた地区に、現在も住んでいるお宅の経験談として聞かれる話。誰かが尋ねてきて家の玄関のベルが鳴るのだけれど、出てみると誰もいないということがたびたびあるという。壊滅した地区内では、今も人が住んでいる家は他にないの、姿を現すこともなく誰かがベルを鳴らすのかといった説明は無いままに伝えられる噂話である。

⑨「喉が渴いたので水を下さい」と聞こえたので玄関に出るが誰もいない。戸口に水を入れたコップをおいておくと、水が無くなっている。

この話も⑧と共通する構造をもつ、噂話である。場所は特定されていないが、津波の被害が大きかった地区の話と理解され、声をかけてきた人が誰かに関しては言及されないものの、それが被災して亡くなった「人」であることが推測される。

⑩見通しの利くところで、百mほど先に赤い服を着た人が見えていたのだが、チョット目をそらした後、姿が見えなくなる。

最後は市の職員から、自分の経験として直接本人から聞いた話である。彼は被災した水田地帯で被害状況を調査していたとき、百メートルほど先に赤い服を着た人がおり、自分と同じように田圃の被害をみているように見えたという。余り気に留めることもなくちよつと目を離してもう一回見たら誰もいなくなっていたという。間もなく移動する際に、改めてその人がいたはずの場所の廻りを注意しながら車で通つたが、見通しが利いて身を隠すような場所もなく、誰もいないことが確認できたという。

以下、これまで見てきた福島県相馬市から聞こえてきた怪異譚の中から見出される傾向性について若干まとめてみよう。

まずその内容を経験したのが誰かといった観点から整理すると、〈自己の経験〉として語るもの（前述の怪異譚の⑦⑩）、〈知

人の経験」として語るもの(②)、そして(知人の知人の経験)として語るもの(①③④⑤⑥⑦⑧⑨)の三種に大別できる。このうち前二者は数の上では余り多くなく、大半は(知人の知人の経験)となる。その理由として推察されることは、怪異現象を経験する人がそもそも多くはないと言ふことに起因しており、その意味で(自身の経験)を語る人との出会いはなかなか困難なことである。またそうした人の経験が知人を通じて伝播していく際には、当然のことであるが、怪異譚の経験者が特定されるがゆえに(知人の経験)も数的に限定されることになる。これに対し(知人の知人の経験)のように経験者が特定されない場合は、怪異譚を語る際の責任の所在も希薄化し、その結果社会に数多く広く拡散することとなる。(知人の知人の経験)というのは、いわゆる「マクドナルドのニャンバーガー」で、「友達の友達がね……」という時の話と同様で、いかにも信憑性がありそうでありながら、よくよく考えれば「知人」はよく知った仲の人であったとしても、「知人の知人」では誰だか分からないという、一見信憑性がありながら、その実あてにならない情報源である。そうしたことから、怪異譚に占める数の上では、(知人の知人の経験)が圧倒的に多くなる。こうした経験によつて立つ怪異譚からは、その経験に潜む深刻な恐れや叫びなどといったものは薄まり、時には「怪異」を楽しむ娯楽として消費されつつ語られている。

被災地や被災地と関連する人々が住む地域で聞かれる怪異譚

では、そこで語られる(死者から生者への働きかけ)の中で、具体的な死者の氏名が明かされることはあまりない。確かに宮城県気仙沼市においては、亡くなったはずの氏名の明らかな友人とスパーですれ違った話が採集できたが、相馬市内で収集した怪異譚では、そうした個性をもつ死者が登場してくることはなかった。つまり相馬市内の怪異譚では、そこに想定されている死者は固有名詞をもつた死者ではなく、あくまで三人称の死者であった。

そうした事情も作用してか、相馬市内で聞かれる怪異譚において語られる不思議な経験は、(見た)や(聞いた)という感覚によつて把握される場合に比して、(感じた)という感覚の場合の方が多し。収集してきた怪奇譚で語られる死者は、全て三人称の死者であるため、視覚や聴覚を通してそれが誰であるかを特定する精度は持ち合わせていない。逆にそういった漠とした中の死者については、五感を超えた、いわば第六感によつて(感じた)ことで把握されていることが多いものといえよう。

III

怪異現象はどこでも同様に起こりうるというわけではなく、よく起こる「場」があるという理解がなされることが一般的である。このことは震災被災地の事例にのみに言えることではなく、怪異現象全般に共通するものと考えられる。そうした現象

が起こるのは、ある意味、怪異現象が起こる必然性が容易に理解可能な「場」に限定されているものといえる。それが故に、もしもその理由に思い至ることがないならば、ミコのところへ行つて説明を受けるといった行動が取られることは、以前までの東北地方ではそれほど珍しいことではなかったのである。

かかる条件のうち良く聞かれる「場」の例としては、生者へ働きかける死者が生前活動していた〈生活圏〉があげられる。こうした「場」には、この世に寄せる死者の思いが籠もっているという理解から、そこに〈死者から生者への働きかけ〉としての怪異現象が起こる必然性が理解されている。また死者の〈死亡場所〉や〈遺体発見場所〉、遺体を収めた〈墓〉なども、怪異現象の起こる「場」としては理解しやすく、交通死亡事故のあった道の脇に慰霊碑が作られる例にみられるように、死者の最期の思いが籠められていると考えられ、こうした場所には怪異現象が起こる必然性があると見なされている。

ここでは、怪異現象が起こる「場」の更なる事例として〈遺体安置所〉を考えてみたい。想定外の数の遺体処理を行わなければならないとなった東日本大震災直後の被災地では、平常時に遺体の安置に使われていた施設だけでは対応が間に合わず、各自治体では急遽、廃校となっていた小中高等学校や自治体の体育館などを遺体安置所として使用した。それまで死者とは無関係であった施設への遺体安置が開始され始めるや、インターネッ トなどを通じてさまざまな怪異譚が飛び交うようになったので

ある。

ここで具体的にとりあげるのは、震災直後から遺体安置所となった、仙台市に隣接した宮城県宮城郡利府町にある「グラン デイ・21」である。この施設の正式名称は「宮城県総合運動公園」といい、国際大会をはじめとした国内外の大規模なスポーツ大会を開催できる競技施設と、世代を超えて楽しめるレクリエーション施設が併せて整備された、宮城県のスポーツ・レクリエーション関係の中心的施設である。この施設の中でも、最も集客力があるのが「セキスイハイムスーパーアリーナ」で、実はこの施設が、震災直後から宮城県内の遺体安置の中心的な役割を担うこととなったのである。

セキスイハイムスーパーアリーナは、バスケットボールのコートが四面とれるメインアリーナの他にサブアリーナなどからなるスポーツ施設である。しかし他方で、広いメインアリーナは万人程度の収容が可能なことからコンサート会場としても利用されており、震災以前から、宮城県の代表的なコンサート会場でもあった。

東日本大震災のあった三月十一日、当然なことであるが、県の施設であるグランデイ21では避難者の受け入れが行われた。また同時に被災者支援のための拠点にもなり、国内外の救助隊の基地ともなった。つまり震災以降のグランデイ21は、今回の震災の被災者支援へ向けた宮城県における一大拠点であった。そうした中、三月十一日の夜の時点で既に、宮城県警からはメ

インアリーナを遺体安置所として使用したいという申し入れがあったという。既にその段階において、今回の大規模な震災により生じた犠牲者の数が、相当数に及ぶことが予想されたからであろう。その結果、翌日の十二日から、メインアリーナは遺体安置所として使われることとなった。

筆者自身はメインアリーナが遺体安置所になったことを余り気にしていなかったが、五月になると、グランディ21のそばの新興住宅地に住んでいる友人から、「地域の中で、グランディ21の周りで夜中に呻き声が聞こえるという話が広まっている。なぜならば、あそこが遺体安置所だからだ」という話を聞いた。こうした怪異譚が都市化された新興住宅地内で語られているという事実自体が興味深く、早速グランディ21に対する情報をインターネットで探してみると、例えば「宮城の心霊スポット29」というサイトでは、以下のような応答がなされていた。(http://archive.2ch-ranking.net/occul/1302609102.html)

a…四月十六日 一時三十一分 (A氏投稿)

ご遺体ってグランディとかに収容されたんだらう？

グランディもヤバくなるのかな？

b…四月十六日 八時五分 (B氏投稿)

衛生面の事ならグランディのどこに安置しているかにもよるだろうね。まだまだ現役で行ける施設だから今後のことを考えて運用しているだろうし。

オカルト的な事なら以前からイベントのない日のグラン

ディて気味が悪くなかったか!?

以前に県外から来た友人を案内したんだが……かなり不気味だった。

c…四月十六日 十一時六分 (A氏投稿)

グランディ付近に実家あるからよく行くんだけど、不気味なのはわかるわw

なんか気づくと人いなかったりして広い土地に取り残されるからなw

d…四月二十四日 十八時三十四分 (C氏投稿)

利府に行ってきたのだけれど、頭痛がひどい。利府には津波来てないし、単なる体調不良かな。かち割れそう。

e…四月二十四日 十八時四十一分 (D氏投稿)

利府グランディは仙台最大の遺体安置所

f…四月二十四日 二十時三十分 (C氏投稿)

グランディまでは行っていないけど頭痛くて具合悪い

g…五月八日 二十二時五十四分 (E氏投稿)

今日ちょっと用事があってグランディ近くまで行ったんだよ

すごい雷雨の中で全身びしょぬれで立っている集団がいたんだけど、みんな黒っぽくてゆらゆら揺れてて現実感がなくて言うかけっこう距離近かったのになんか霞がかかっているみたいで輪郭がはつきりしないの

あの人たちはもしかしたら

h…五月九日 二十時三十三分 (F氏投稿)

今日グランディイに行ったら、機動隊の様な服を着た人たちが魚屋さんとか漁港の人が着るゴム製のエプロンと長い手袋姿で休憩していたけど、どう見ても警察関係者の服装なのだが、警察じゃない様な気がするんだな。休憩時間だし、仕事も仕事だし、まったりしてもらっていいのだが、休憩場所とか休憩している体勢が警察っぽくないんだよ。(だらしなとか、非常識ではない) 葬儀屋さんかな? 警察と県が雇ったアルバイトかな? すごく気になる。

若い世代が多く参加しているものと思われるこのサイトでは、震災から一ヶ月以上たったところでグランディイ21関連の投稿が出てくる。そこでの話題は、グランディイ21が遺体安置所になった事で、施設の今後の継続を心配すると共に、この施設自体が怪異の場になってきたのではないかとの懸念が述べられている(a・b・c)。またd・e・fでは、投稿後に間髪入れずにレスポンスが入っており、身体の不調の原因が遺体安置所であるグランディイ21に近づいたためとする考え方が述べられ、またg・hでは、グランディイ21が怪異の場であることを暗示するような情報が述べられる。特にdにおいては頭痛の原因を考えて「利府には津波来てないし、単なる体調不良かな」とあるが、その背後には津波被災地では「単なる体調不良」とは別の理由で頭痛が起こる原因があることが前提されているようである。

そうした中、「9月に仙台で公演のデイズニーオンアイスって

グランディイ21で本当にやるのですか? 最近まで遺体安置所でしたよね: 私は亡くなられた方を思うとテンションが上がります。皆さんは今後コンサートとかあったらいきますか?」(http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1366598158) という投稿が「Yahoo 知恵袋」へなされたのは七月十五日のことである。グランディイ21では、七月になると九月三、四日のデイズニー・オン・アイス、九月十、十一日の桑田佳祐のライブ公演が決定し、前売り券の販売が開始されたのである。

遺体安置所であったアリーナが、若干の改修の後に、以前と同じコンサート会場に戻っていかうとする動きに対しては、さまざまな意見が交わされるようになった。前述の投稿に対しては「私は、遺体安置所は取り壊されると思ってたので、グランディイでライブやデイズニーがあると聞いて驚きました。震災で亡くなった方が運ばれ、信じられない思いで対面されたご遺族を思うと、何故、ライブ会場として利用するのかわかりません。遺体安置所と決まった時点で、管理者? 県? は、潔く取り壊しを決めて欲しかったです」といった返信が「ベストアンサー」として取り上げられており、全体的傾向としてはマイナス評価をするものが多いことがわかる。一旦遺体安置場所になった施設は取り壊されると考えていた人が多いことは、このころの他のサイトへの投稿からも明らかになる。とはいえこの投稿に対する先の質問者からのコメントの中には「グランディイ21大好きな場所だったので再開するなら普通にはじまってほしくないで

す。慰霊碑や花壇整備など追悼のための何かやっつけてほしいと思
いました」と、県が進めるアリーナ再開の動きに対しては「追
悼のための何か」をした上での再開ぐらいは配慮して欲しいと
いう希望が書かれている。こうした感覚の中には、それまでコ
ンサート会場として使われてきたアリーナではあるが、一旦遺
体安置所となって遺体を安置したという事実が発生して以降、
特別な意味が付与された「場」となったという認識がもたれて
いる。そして本来ならば不可逆的現象で元には戻れないものの、
百歩譲って再開するならば、付与された特別な意味を薄めるため
の追悼行為が求められているわけである。こうした投稿者の言
説から窺われる特別な意味こそ、その「場」に遺体が安置され
ていたことから派生する、(死者から生者への働きかけ)の可能
性に対する恐れと考えられよう。

七月の初めより、メインアリーナに安置されていた遺体は全
てプールの方に移され、メインアリーナの改修が始まった。衛
生面から、強力な消毒を何度も繰り返し、死臭に対する徹底的
な消臭対策を、急ピッチで実施してきたという。その結果、八
月終わりにはほぼ以前までのアリーナとして復帰して使えるよ
うになった。そして予定通り、九月三日に震災以来最初のイベ
ントとしてのデイズニー・オン・アイスが開催された。この時
の興行がいかなる形で行われたものか、とりわけ特別な意味が
付与されていたはずの「場」に対していかなる関わりがなされ
たかなどについては、現段階では残念ながら情報を得ることは

できていない。そこで以下では、この企画に次いで九月十日と
十一日、アリーナで行われた桑田佳祐のライブに焦点を当てて
見ていくことにしよう。

桑田佳祐の「宮城ライブ／明日へのマーチ!!」コンサート
に関しては、この時の模様がDVDで販売されている。その初
版には限定板の写真集がついており、コンサートのみならず、
掲載された写真を見ることで、コンサート前後の様子もある程
度知ることが可能である。例えば、遺体安置所当時には数多く
の遺体が並べられていたメインアリーナにはパイプ椅子が並べ
られ、立錐の余地もなく座った聴衆たちが両手を高く掲げてい
る写真からは、会場がものすごい熱気に包まれていたことがよ
くわかる。

入手したDVDを資料として見ていく際の筆者の問題関心は、
震災直後に遺体安置所となったことから特別な意味が付与され
た「場」となったと考える人が多々いるアリーナが、コンサー
トを実施していく中でどのように扱われていたのかということ
であった。そうした点に気をつけて見ていくと、コンサートは
最初に、桑田佳祐がしっかりと歌う『青葉城恋唄』でスタート
し、引き続き黙祷が行われた。その際桑田は「あれから丁度半
年なので、このたびの震災で亡くなられた方に慎んで黙祷を捧
げさせていただきたい」と述べたが、このアリーナが遺体安置
所だったことには一切触れはしなかった。

とはいえコンサート前日のリハーサル前には、桑田らミュー

ジシャンやスタッフはお払いをしてもらっていた。客席最前列前に立って舞台全体を払おうと幣を大きく振る神職の真剣な眼差しが写る写真からは、ここが遺体安置所であったということ意識した念入りな祈りがなされているように思われ、低頭中の関係者らの神妙な面持ちからも、真剣な祈りが伝わってくる。DVDには会場の下見に訪れた八月十四日、職員から遺体安置所当時の様子を聞かされた桑田夫妻が献花する場面も収録されていて、今回の関係者たちは、アリーナが遺体安置所であったことを充分知っていたがらのコンサート開催ということであった。またさらに、桑田にとって久々に行うグランディ21でのコンサートは、自身ががんの手術を経て以後最初の機会であったということも重要な意味をもっていたものと思われる。

黙祷の後には、トランペットによる「遠き山に日は落ちて」の演奏に乗せて、「このグランディ・21がいつまでも音楽の聖地であり幸せの象徴でありますように祈念し」といったメッセージがスクリーンいっぱいに映し出された。この例のように、怪異の場と考える人も多かったグランディ21を、音楽の聖地として再興していこうとする桑田らの意思表示はステージのそこそこに現れており、数ヶ月前には遺体が並べられていたまさにその場所に座っている観客たちは、祝祭空間と化した喧噪に包まれた会場の中で、桑田佳祐のリードで大きく弾けながらコンサートを楽しんだのである。

グランディ21のアリーナにおいて、以上のように行われ

た桑田佳祐のコンサート以降、インターネットの中で投稿されていた、この場所を怪異の場とする言説は次第に姿を消していった。その転換点となったのが、まさに桑田佳祐のコンサートで、それまで怪異の場と考えられていたアリーナが、彼のコンサートが行われ、祝祭空間としての時間を経験したことで、それ以前までもたれていた怪異性といったものがすっかり拭き取られてしまったと言う印象が強くなったのである。以後グランディ21のアリーナでは、毎月少なくとも二、三回、場合によると毎週末には著名なミュージシャンのコンサートが入り替わり開かれるようになっており、現在ではこのアリーナのことを遺体安置所と関連づけて論ずるような言説を目にすることはほとんどない。つまり、震災直後から遺体安置所となったグランディ21は、その時点では一種の怪異空間と見なされていたわけであるが、それがアリーナとして再興されて間もなく行われた桑田佳祐のコンサートを契機として祝祭空間に生まれ変わり、そうした経緯をしたことが、そこに付与されていた怪異性を希薄化させ、消滅させたものと考えられるのである。

このような経緯を見てくると、社会的に怪異の場であるとするレッテルの貼られた空間であっても、それは必ずしも永続するわけではなく、どこかで転換する可能性をもつことが明らかになる。そしてそうした転換の契機というのは、その空間が一時的にせよ祝祭空間になるということに重要なモメントがおかれているように見ることができであろう。

怪異の場が祝祭空間となることでその怪異性を希薄化し消滅させた例として、現在一大歓楽街となっている大阪の千日前が知られる。現在の千日前は、江戸時代初期には千日墓地と呼ばれる大規模な墓地であって、刑場や焼き場も併設された怪異の場であった。そうした空間が歓楽街へ変わったのは十八世紀初め頃からのことで、その後墓地が移転し、難波駅ができるなどしたことで、この地は十九世紀終わりには歓楽街に変わっていったのである。つまり怪異の場というレッテルの貼られた忌み嫌われる場であっても、祝祭空間へと姿を変えることで社会に受け入れられて展開していくことが明らかになるのである。

とはいえこうした経緯を経た「場」においては、時折、祝祭空間が怪異の空間へと逆行することも見られる。千日前においては「ミナミの大火」や「千日デパートの火災」といった、災害が起こった時、ここがかつて墓地という怪異の場であったことが、歴史の中から頭をもたげて語られるのである。同様なことは、グランディ21においても見られるのか。こうした点は、今後とも注意して見ていかねばならないところであろう。

IV

二〇一二年の夏のこと、筆者は石巻市雄勝の三陸海岸の被災地に日帰りで行き、夜の九時過ぎに車で仙台へ帰ることとなった。その日は帰りが遅くなったので、少しでも早く帰ろうとナ

ビで高速利用を設定し、高速経由で帰宅するつもりであった。出発直後は、車で海沿いの道を南下し始めたので、原則的には海を左側に見ながら進んでいったが、高速に乗るためには、雄勝を出たあと、右に曲がって少し内陸の方に行かねばならなかった。ところがふと気が付くと、ナビの指示通りに走っていたにも関わらず、高速に出る道を通り過ぎて、浜沿いの道をかかなり南下していたことに気付いたのである。街路灯も点いていなかった。分岐を見落とさないようナビの指示には充分注意していたはずだったので、である。そこから戻るのでは時間がかかるので、ともかく海沿いに進んで行こうと心に決めたその瞬間、筆者は思わず「あ、誰か呼んでいるな」と思った。こうした解釈こそが、筆者のもっている「文化」のなせる技だと言うことになるが、ごく自然にそう思ったのである。そこで次に、ならば一体誰が呼んでいるのだろうか、と思い出してみた。今回の震災で亡くなった筆者の知り合いは、岩手県の陸前高田市と宮城県の名取市にいたのであるが、その時車で走っていた石巻市周辺に思い当たる人は全くいなかった。とは言えその時の筆者は、誰かが呼んでいるに違いないと思いつきながら、時折誰もいない後部座席を確認しつつ運転を続けてきた。

震災の影響で舗装が壊れた道路は、時には片側通行となっており、そうしたところには信号機がついていた。運が悪いと一分以上も信号機の前に止まって待たねばならず、真っ暗闇の自然の中に浮かび上がる、目の前の信号機の赤色がやけに印象的

であった。また集落の脇を通っても停電で人氣が全くなく、崩れかけた家々がヘッドライトに浮かび上がるゴーストタウンのような状態であった。ともかく、そのようなリアス式の曲がりくねった浜沿いの道を、小一時間かけて石巻の街中へと入ってきたが、その間対向車は一台もなく、また後ろから来る車も全くなかった。そして誰に呼ばれて海沿いの予定外のコースを取る羽目になったについては、最後までわからないままであった。

以上は、筆者自身が被災地において怪異現象を経験した際の記録である。そのきっかけは、ナビという科学技術を活かした機械で設定した道を、車は実際には指定通りに通らなかつたという事態が起こったことである。これに対し筆者は、前提として「筆者の設定は間違っていない」「機械は設定通りに作動する」と考えており、そうでありながら「ナビが設定通りの作動をしなかつた」という事態に遭遇したことで、まずはその原因を考えてみた。すると論理的原因を発見できないままに、思わず出てきた回答が「死者が筆者を呼んでいるためナビをそのように作動させた」という理解であった。そうした思考法を筆者が常にしているわけではないが、前述のような怪異現象が起こった時、筆者が生きてきた文化の中で聞いたことがある言説が、ごく自然に浮上してきたのであろう。その意味では、ここで扱ってきた怪異現象に対する理解の中には、そうした怪異経験をしたという人々や、怪異譚を伝播させていく人々の間に共有されている文化が重要な意味をもつことになる。

本稿においては、東日本大震災の被災地において確認される、〈死者から生者への働きかけ〉としてなされたとされるさまざまな怪異経験に着目し、その意味について考察してきた。こうした怪異現象は、平常時の社会においてもおそらく変わらず起こっていることなのであろうが、今回の大震災を契機としたさまざまな社会変動の中においては、そうした現象が、震災被災地周辺において、ある意味濃縮されて顕現化しているものと考えられる。大きな被害をもたらした震災ではあるが、こうした事例からは、〈死者と生者の接点〉解明へ向けた道筋が見えてくる。

*本稿は、二〇一四年六月七日に東北大学川内北キャンパスのマルチメディアホールにおいて開催された、日本口承文芸学会第三八回大会において「震災被災地にみる死者と生者の接点」の題名で行った公開講演の内容を骨子に、その後入手した資料を加味してまとめ直したものである。

(すずき・いわゆみ／東北大学)